

10月8日の地球科学輻合ゼミナールは川本竜彦先生の担当だった。

スラブ流体がどういうものなのかについて水の影響の大きさを呼び水にしてお話してくださった。

地球内部の水が地球に関連する研究者の望むように振る舞うと前置きしてから、水を含む”流体”を紹介しその中にスラブ流体が登場した。

実はプレートテクトニクス以前から地球内部の挙動について水を絡めた考察は行われていたのだと1962年のCoatsの研究を引きながら話し、その一方で50年経った今、その説明の図はカラーになっただけなのだと行って笑いを誘っていた。

当然そういうわけではなく、後半は川本先生のグループの研究を(1)臨海終端点、(2)塩水、(3)元素分配の3本立てで紹介してくださった。

最後には地震や温泉、火山をつくるのは海の水なのだと綺麗に締めて講義は終わりました。

個人的には、1つ目のトピックである臨海終端点に関する話で、以下の二点の違いに関する先生の紹介された仮説が印象に残っています。

- ・冷たい沈み込み帯：多様な組成を持たない
- ・暖かい沈み込み帯：多様な組成を持つ

これらの違いは、流体があがってくるときに臨海終端点をまたぐか否かで決まるというお話でした。